



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第631号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第631号. 京大東アジアセンターニューズレター 2016, 631

ISSUE DATE:

2016-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216222>

RIGHT:

2016 年 8 月 1 日発行 第 631 号

CONTENTS

OMA ウズベキスタンを中心とする中央アジア経済情勢視察団へのご案内.....	2
シンポジウム「韓国労働政策の現状と展望」の概要紹介.....	4
金棺ミイラとデンデラ野とよだかの星 小島正憲	8
【中国経済最新統計】	14



OMA ウズベキスタンを中心とする中央アジア経済情勢視察団へのご案内

大阪能率協会（OMA）アジア・中国事業支援室が主催する恒例のアジア経済視察団のご案内が来ていますのでご紹介します。大阪能率協会（OMA）は、京大東アジア経済研究センター支援会の法人会員であるほか、会員企業 4 社が本センター支援会の法人会員です。ご希望の方は OMA 事務局までお申し込みください。（編集者：劉徳強）

私たち（一社）大阪能率協会（OMA）アジア・中国事業支援室は、これまで中国の沿海部から内陸部の西安、成都、昆明、青海省、チベットまで中国主要各地の視察を終え、ここ 8 年間は、一転してインド、ネパール、ベトナム、カンボジア、中国東北・ロシア極東、インドネシア、ミャンマー、バングラデシュ、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピンとアセアン主要国を含むアジア全般の視察をほぼ終了し、一昨年はトルコ、昨年は中国（北京・天津）・モンゴル視察を行いました。

本年は、いにしへの昔より、東西交易路、シルクロードの中継地として栄華を誇ったチムール帝国の首都・サマルカンドのあるウズベキスタン視察を企画しました。今話題の「一帯一路」「AIIB」の中心地域でもあります。

視察第 1 日目はタシケント日本大使館並びにジェトロ事務所を中心に、第 5 日目には、再びタシケントでウズベキスタン対外経済貿易省と日系進出企業等を訪問します。タシケント～サマルカンド間は、高速鉄道アフラシャブ号（ビジネスクラス）に往復乗車いただきます。元々親日国である上、昨年は安倍首相が多くの財界人の同行を得て訪問し、より親密度が高まったこともあり、在東京のウズベキスタン大使館の話では、治安も安定しており、今年は、日本人の同国への業務出張者および観光旅行者共に久しぶりに増加傾向にあるとのことでした。是非この機会に文明の十字路、中央アジアの中心地ウズベキスタンを訪ねてみませんか。



サマルカンド：レジスタン広場



タシケント：ナヴォイ劇場



タシケント：地下鉄

日程（2016年）：

- 第1日目 9月19日（月）：関空発 10:50 OZ111 ソウル経由タシケント着 20:20
(タシケント泊)
- 第2日目 20日（火）：日本国大使館、ジェトロタシケント事務所訪問
工芸博物館、バザール、日本人墓地、フォークロアショー
(タシケント泊)
- 第3日目 21日（水）：高速鉄道でサマルカンドへ、サマルカンド市内視察
(サマルカンド泊)
- 第4日目 22日（木）：サマルカンド視察（グリエミル廟、紙すき工房
郷土博物館、ワイン工場、絨毯工場等）
高速鉄道でタシケントへ (タシケント泊)
- 第5日目 23日（金）：ウズベキスタン政府対外経済貿易省訪問、
市内視察（ナヴォイオペラバレエ劇場外観、地下鉄乗車等）
夕食後空路帰国の途へ タシケント発 22:20 OZ574
- 第6日目 24日（土）：08:50 ソウル（仁川）着
ソウル（仁川）発 14:10 OZ114 関空着 15:50 解散

旅行代金：

- お1人様（2名1室の場合） 169,000円（ただし非会員は+15,000円）
1人部屋追加料金（19,500円）：別途燃油チャージ、空港税など9,490円
査証代（実費3,000円、手数料4,320円）が必要です。

募集人員：30名（先着順）

お問い合わせ・お申込み：

OMA 一般社団法人 大阪能率協会
〒540-0029 大阪市中央区本町橋 2-5 マイドームおおさか6階
事務局 TEL：06-6941-2709、FAX:06-6948-5666、E-mail：oma@crux.ocn.ne.jp

シンポジウム「韓国労働政策の現状と展望」の概要紹介

文責：金佑榮

京都大学経済学研究科博士課程

2016年7月23日（土）、京都大学経済学研究科みずほ講義室にて「韓国労働政策の現状と展望」と題するシンポジウム（東アジア経済研究センター主催）が開催された。

韓国の朴槿恵政府は、経済の活性化に向けた4大改革（労働市場改革、公共部門改革、教育改革、金融改革）のなかでも、労働市場の改革を最優先課題に位置づけて、推進してきた。しかし、賃金ピーク制と一般解雇ガイドラインの導入、就業規則変更要件の緩和などに関しては、労働組合や野党は強硬な反対運動を展開した。今年4月に行われた総選挙で与党セヌリ党は大敗したので、野党の協力なくしては、法案は一本も通らない状況で、去年の大統領選挙を迎えることになる。こうした状況のなかで、労働市場改革の方向性は、韓国の政治・経済の今後の動向を左右する重要な争点であり続けると考えられる。

この問題意識から、講演者として、金炯基先生（慶北大学経済通商学部教授）と安周永先生（常葉大学法学部講師）のお二人に、それぞれ、韓国労働市場改革における争点と今後の展望と日韓の労働改革の方向性の差異や共通性についてお話いただいた。

シンポジウムでは、まず、盧武鉉政権時代に大統領諮問委員会委員を務め、労働政策担当のブレーインの役割を果たした金炯基教授が「韓国労働政策における争点と展望」と題する講演を行った。講演の主な内容は、2015年9月15日に合意さ



れた労働改革推進に関する政労使大妥協の内容と争点、それが崩壊した経緯、今後の展望、代案的な労働改革の方向性についてであった。

金先生は、講演の前半部で、現在、労働側と経営側が対立している核心的争点として、4つの点があるとし、第1に、賃金ピーク制導入の義務化のための「就業規制不利益変更」の緩和、一般解雇ガイドラインの具体化、労働時間短縮などのための労働基準法の改正、第2に、有期雇用の雇用期間延長のための期間制勤労者法の改正、第3に、厳しく制限された派遣法緩和のための改正、第4に、失業手当の給付水準向上のための雇用保険法の改正があると述べられ

た。

講演の後半部では、代案的労働改革の方向性について、金先生の見解を聞くことができた。

金先生は、すでにかなり柔軟化されている韓国労働市場をより柔軟化するには、第1に、失業手当の所得代替率の引き上げ（現行50%から70%へ）と支給期間の延長（3-8ヶ月から1年へ）、第2に、失業者の再就業を支援する積極的労働市場政策の強化によって、労働市場の安定性を高める、いわゆる「柔軟安定性（Flexicurity）」の実現が必要であると主張された。しかし、こういった柔軟安定性の実現のための財源を確保するには、増税-福祉拡大という課題解決が必須要件であり、したがって、富裕層増税と普遍的増税といった税制改革と福祉改革が労働改革の前に実施されるべきであると強調された。また、労働改革における大企業-中小企業間の労働市場の二重構造の解消、財閥改革なども重要な課題として取り上げられた。



金先生の講演でとりわけ印象的だったのは、財閥系大企業が取引相手の中小企業に強制している不当な納品単価引き下げを根絶するための制度改革、すなわち、「公正取引法の19条の改正」を強調されていたことである。ここで重要なのは、1997年のアジア通貨危機以降、韓国経済・社会では、新自由主義的な構造改革が急速に行われ、現在の大企業-中小企業間の賃金格差と正規雇用者と非正規雇用者の間の差別（雇用差別、賃金差別、福祉差別）が拡大していく背景には、市場支配力をもつ財閥系大企業による中小企業からの利益収奪があったという点である。したがって、韓国の労働改革の問題は、財閥系大企業の抜本的な企業統治改革の問題と切り離して論じることができない。

続いて、労働法制度の日韓比較を専門として研究している安先生が「労働市場改革の日韓比較」と題する講演を行った。安先生はまず、日本と韓国の労働改革の方向性の類似点として、第1に、正規雇用の労働時間の柔軟化、解雇規制の緩和といった規制緩和を通じた「雇用移動の促進」、第2に、有期雇用の雇用期間の制限、差別是正といった再規制を通じた「非正規雇用の待遇改善」を挙げた。そして、対立構図の類似点については、第1に、政府・経営側と労働側（非正規労働者を除いた組織率の低い企業別労働組合）の対立、第2に、社会民主主義政党の脆弱性があると述べられた。

さらに、日本と韓国の労働法制を比較すると、両国とも労働者派遣法の改正と有期契約の待遇改善が行われているが、詳しく見ると、日本では徹底的な規制緩和が行われており、韓国では限定的な規制緩和が進んでいるという違いがあると説明された。しかし、日韓ともに新自由主義の影響、脆弱な労働運動や企業別労働組合といった状況のなかで、労働市場においてかなり一方的に規制緩和が進んでいる点を問題点として指摘された。

労働組合が置かれている環境について、政府、経営側、労働組合の権力資源という3つの視点から比較してみると、すべての領域で日本の労働組合の方が韓国より良い環境に置かれていると述べられた。そして、両国の労働組合の戦略を比較すると、日本の労働組合は主に審議会など政策アリーナ内部での交渉のようなインサイダー戦略を重視し、非組合員労働者や様々な市民運動との連携戦略が乏しいという特徴がある。他方、韓国の労働組合は、政策アリーナ外部からの圧力をかけるといったアウトサイダー戦略をとりつつ、大企業の正社員だけではなく、脆弱な労働者の包摂や市民団体との連携を重視するなどの連携戦略も用いてきたと比較した。

最後に、労働法改正と労働環境の改善との関係について、労働法による規制の限界が指摘された。というのも、労働法の規制強化が必ず労働環境の改善を意味することではないからである。たとえば、有期契約の雇用期間を制限したとしても、経営者は雇用期限の前の雇い止めという対応をとるかもしれない。また、派遣法を規制強化したとしても、経営者は偽装請負という形での規制回避を行うかもしれない。したがって、こうした対応を阻止するような現場での労使の権力関係がより重要である。また、労働法の内容には結局、労使の権力関係が反映されるため、労使の権力関係は非常に重要であると強調された。

講演後には、質疑応答の時間が設けられ、参加者の方々から多数の質問が寄せられた。まず金先生に対し、「講演の中で述べられた韓国大企業の中小企業への横暴に関して、日本には、納品単価を引き下げる限度を定める規制や政府による抜き打ち的な検査などが行われている。韓国にはそのような大企業に対する規制はないのか」という質問が寄せられた。

金先生は、韓国にも例えば、「納品単価調整協議制」や「不当な納品単価に対する補償請求制度」などがあるものの、実効性がないと回答した。つまり下請け企業がそのような制度を利用しようとする、次回からは、取引関係を解消されてしまうことが起こるといふ。したがって、公正取引法の19条の改正によって、中小企業の集团的取引を合法化し、この集团的取引を通じて納品単価を交渉する権利を認めるべきであると強調された。

さらに、「韓国の場合、株式所有などの外資系によるガバナンス構造が高まっているが、こうした現状のなかで、これらに対する規制も重要な課題ではないか」という意見があった。

金先生は、1997年のアジア通貨危機以降、韓国経済は株主価値を重視する、いわゆる、株主資本主義基調が強まった経緯もあって、外資系資本を直接的に規制するのは難しいと回答した。しかし、外資系による株式所有に関しては、利害関係者（労使共同）の参加を前提に、会社法を改正するなど、今後、外資系資本をいかにコントロールしていくのが重要であると補足された。

続いて安先生に対して、「賃金制度に関して、中国の場合、最近、最低賃金の地域別引き上げが競争的に行なわれており、内部では終身雇用の重要性に対する認識が高まっているなど、同一労働・同一賃金の動きも行政の力で行なわれている。こういった点に関して、韓国の現状はどうか」という質問が寄せられた。

安先生は、韓国の最低賃金制は、全国一律的に適用されており、地域別適用はないと回答した。そして、終身雇用に関して、韓国はすでに終身雇用体系が非常に弱まっており、むしろ、今後は終身雇用という概念自体を除いて議論する方が良いといえるほど、終身雇用が形骸化されていると説明された。同一労働同一賃金に関しては、最近、その重要性が言及されてはいるが、制度的基盤はまだ備えていないと回答された。

昨年11月には「明日へ」（韓国タイトル：カート）という韓国映画（大型スーパーの非正規労働者の解雇撤回闘争を描いた作品）が日本で公開された。また、「HOPE」（韓国タイトル：未生）というドラマ（新入社員とサラリーマンの大変さを描いた作品）が日本でリメイクされ、今年7月からフジテレビ系列で放送が始まった。このことは、両国において、労働問題に対する社会的関心が広まっていることを意味し、一方では、それが両国における共通の課題でもあるということの反証であろう。

労働改革をめぐる労使間の対立は、もしかしたら、資本主義における永遠の課題であるかもしれない。しかし、新たな価値というのは、人間の肉体的・知的労働が先にあってからはじめて創出されるものであり、適正な労働条件の下でのこういった人間の労働なくしては、資本主義は存続できないといっても過言ではない。そういう意味で、本シンポジウムで行われた2つの講演はまさに、両国の労働改革の今後の方向性を指し示す、非常に示唆に富む内容であった。

金棺ミイラとデンデラ野とよだかの星

01.AUG.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

岩手県南部は日本の縮図のような場所である。

平泉には、かつて藤原三代が栄耀栄華を極めた証の金棺ミイラがある。遠野には、極貧のゆえに老人が捨てられたデンデラ野がある。そして花巻には、宮沢賢治が生まれ、彼が童話「よだかの星」で、それらを見事に昇華させた。



1. 金棺ミイラ

花巻空港から東北自動車道を南下し、1時間ほど走れば平泉に着く。平泉は、国内で12番目、東北では初となる世界遺産に登録されており、そこには中尊寺や毛越寺をはじめとする仏教寺院や浄土庭園など、平安時代末期に奥州藤原氏が築いた華麗な黄金文化の遺産群がある。ことに中尊寺の金色堂には藤原三代の遺体が黄金の棺に納められている。またそこには黄金の仏像が多数安置され、堂全体も金箔で飾られている。それはまさに藤原三代が栄耀栄華を極めた証となっている。現在でも、多くの観光客がこの黄金の世界遺産に惹かれて、平泉を訪れている。

奥州藤原初代の清衡は、後三年合戦のあと、敵味方の区別なく、すべての霊をなぐさめ、仏国土を実現するため、1105年に中尊寺の建立に着手、二代基衡は毛越寺を造営開始、三代秀衡が完成させた。これらを実現可能にした背景には、膨大な量の産金と南北交易による大きな利益があり、この潤沢な資金を惜しみなく使うことにより、平泉は成り立っていた。なお、古書には、天平21年（749年）、平泉からさらに1時間ほど南下した宮城県遠田郡湧谷町

より、黄金900両を聖武天皇に献上されたことが記されており、これによってその地が、日本初の産金地とされている。また平泉から1時間ほど東へ走った気仙地方にも黄金の産地があったともいわれている。

しかし最近の研究では、平泉と遠野の間にある、遠野市小友町を中心にして50以上の金山があったことが明らかにされている。今でも小友町の山間には、金山あとが数多く残っている。平泉の黄金文化を支えたのは、遠野の金であった可能性が大きい。平泉が遠野の黄金で栄えたのに反して、その遠野には極貧の故の、姥捨て場所であるデンデラ野があった。

2. デンデラ野

平泉から東北自動車道を花巻方面に約30分北上し、釜石自動車道に入り、30分ほど東に走ると遠野市に入る。この遠野にデンデラ野がある。デンデラ野とは「昔は老人が60になると、デンデラ野に棄て



られたものと謂う」(柳田国男著「遠野物語拾遺」より)、つまりこの地方の姥捨て場所のことである。デンデラ野といわれている場所には、のどかな田園が広がっており、とても寒村という雰囲気はなかった。デンデラ野は小高い場所にあり、周囲の見晴らしは良かった。私は、「熊出没注意」という看板を気にしながら、老人たちが共同生活をしていた様子を再現したとされている藁小屋を見に行ってみた。そこにはあまり訪れる人がいない様子であった。もちろん私がそこにいる間、他人にはまったく出会わなかった。私は2011年7月に、このデンデラ野についての短文を書いたことがある。今回はやっとそのデンデラ野を、この眼で見ることができた。そして私の記述が間違っていなかったことを確認した。以下に、そのときの文章を再録しておく。

「デンデラ」

「昔は老人が60になると、デンデラ野に棄てられたものと謂う」(柳田国男著「遠野物語拾遺」より)。

古代には、棄老の風習が日本各地にあった。先日の拙稿で取り上げた長野県更科の「姥捨て」もその一つであるが、一般によく知られている場所は岩手県遠野市にある「デンデラ野」であるという。少し長くなるが、下記に菊池照雄氏の著「遠野物語をゆく」から、その「デンデラ野」に関する記述を紹介しておく。

遠野は北上山地の奥深い山中にぽつんと奇蹟的に平地の空間があつてできた盆地の中の町だ。遠野にはデンドラ野という老人を捨てたといわれる場所があることは、「遠野物語」「聴耳草子」で紹介されている。土淵村の高室、青笹村の字糠前と善応寺の境、上郷村の来内、小友村の長野の藤沢、同じ村の外山、綾織村の二日町、附馬牛の小倉などに現在もその名が残っている。

土淵の佐々木喜善の生家のすぐ近くのデンドラは、現在も原野、集落とはほんのひとまたぎの小川で区切られた高台にある。ここには低い土塀をまわした一屋敷分ほどの区画がある。瀬川マサエばあさんが生前に「ここは捨てられた老人たちが小屋掛けをして自分たちで食物を拾い集めたり、畑をちょっとばかりつくったりし、やがて体が動かなくなり衰弱して死を待った場所で、最後にここに捨てられた人はヨシエというばあさんであったス。私もその頃生まれていたら今頃はここにいたべえス」と話してくれた場所だ。

青笹のデンドラ野も集落からすこしばかり離れた原野だ。中古、ここに六角山善応寺という寺があった。十王堂だけが残し、その別当を佐々木喜平どんの家でやっていた。…（中略）小友村長野のデンドラ野は山裾の台地の原野にあった。この向かいに寺地山があり、山頂に寺があった。死人が出るとこのデンドラ野に安置し、白いのぼりをあげると、山頂の寺から和尚が回向をしたという。ここも飢饉の時は老人を捨てたという。

このほかのデンドラ野も集落からすこしはずれた、どの野も家を見渡せるほどの低い台地の原野だ。集落とこの野との境界はほんの小さな流れで区切られ、距離は歩いて5分から10分程度の場所だ。姥捨伝説というと人里離れた山の奥と想像しがちだが、遠野の姥捨場は家で一声よぶとたちまち声のとどくほどの近くにある。

この記述を読んで、私がまず驚いたのは、姥捨場が村のすぐ近くにあったということである。次に捨てられた老人たちがそこで小集団を形成し、生き延びていたということである。この記述から察する限り、捨てられた老人たちは、「観念し従容として死につき、極楽浄土を夢見て、即身成仏を目指したのではなく、しばらくの間、そこで小集団を形成し生き延びた」のである。私はこのような老人たちの心境をさらに深く知ろうと思い、ネット上で資料を検索してみた。すると偶然、「デンドラ」という本が引っ掛かってきた。さっそく買い求め読んでみると、そこには「姥捨て山の続編」という宣伝文句で始まる棄てられた婆たちの小集団物語が描かれており、「姥捨て伝説」とはまったく異質のものであった。また本の帯には、その小説が映画化され、6月25日上映開始になると書いてあった。私はさっそくそれを観に行ってみた。

《 新潮文庫「デンデラ」(佐藤友哉著) のカバーの言葉 》6月25日全国ロードショー **姥捨山には続きがあった。** 斉藤カユは見知らぬ場所で目醒めた。姥捨ての風習に従い、雪深い「お山」から極楽浄土へ旅立つつもりだったのだが。そこはデンデラ。「村」に棄てられた50人以上の女により、30年の歳月をかけて秘かに作り上げられた共同体だった。やがて老婆たちは、猛り狂った巨大な雌熊との対決を迫られる。生と死が絡み合い、螺旋を描く。あなたが未だ見たことのないアナザーワールド。

この映画には、草笛光子、浅丘ルリ子、倍賞美津子、山本陽子などの往年の美人女優が、薄汚い老婆の格好で出演していた。しかもこの映画には、棄てられた老婆たちが山奥で生き残り、自分たちを棄てた村と男社会へ復讐するために、小集団を作り生き抜いていくが、罨（ひぐま）に襲われたり、雪崩にあったりして、その目的を果たせず葛藤を続ける姿が描かれていた。この映画の中に爺は出て来ない。同じように山に棄てられた老人でも、爺は集団の対象とはならず、婆たちに助けられることはなく見捨てられていた。この点については、私は男なのでなんとなくしっくりこなかった。それでも上記の菊池氏の記述にもあるように、棄てられた老婆たちが小集団を作って生き延びたというこの映画の設定は、可能性のある話だと思った。

しかしながら、その老婆たちが村や男社会に対する恨みで、復讐を企てるという設定は頷けない。老婆たちは自ら望んで、しかも喜んで姥捨場所に入ったと考えられるからである。この本の著者の佐藤友哉氏は31歳の若者であり、老人の心境を理解せよという方が無理であり、彼の姥捨て思想の本質への無理解を非難することはできない。老人たちは、喜んで棄老を受け入れ、村落共同体の繁栄のために「従容として死に就く」ことを、つまり即身成仏し極楽浄土に行くことを自願したのである。私は、これが日本人の死生観の根本にあると考える。少なくとも復讐ということは考えられない。

なおこの映画の中で、老婆たちが団結して果敢に罨に立ち向かう美しくも勇ましい様子は、さながら福島原発に立ち向かう原発シニア隊に似ている。5月中旬、元技術者で原子力関連施設の知識もある東京在住の山田恭暉さん（72歳）が、福島第1原発の事故対応の長期化が予想される中、「僕たちリタイア組がやるしかない」と収束作業にあたる行動隊の結成を呼びかけた。山田さんが「次の時代に負の遺産を残さないため」として、原則60歳以上で現場作業に耐えられる体力、経験を条件に志願者を募ったところ、6月27日現在で、志願者399人、賛同・応援者1250人となり、450万円近い寄付が集まったという。山田さんは「最大限に安全に帰ってくるということがわれわれの

課題である」と語っているが、この老人たちが決死の覚悟であることは明らかであり、私にはその姿は神々しく、美しく、勇ましく見える。この原発シニア隊に対して、海外メディアでは「神風特攻隊の再来か」と揶揄するような報道があったようだが、外国人には日本人の即身成仏思想は理解不能であろう。私も老人決死隊の組織化を提唱していた手前、この山田氏の「福島原発暴発阻止プロジェクト」に賛同し、ただちに馳せ参じなければならないところなのだが、まだもう少し人生に未練があるし、やり残していることもあるので、精神的支援のみでお許し願いたい。卑怯者、臆病者と言われると思うが、72歳まで生かして欲しい。

3. よだかの星

遠野から釜石自動車道を花巻方面に30分ほど走って、高速道路を下りるとすぐに、宮沢賢治記念館がある。宮沢賢治について、私は小学校の教科書で、「雨にも負けず……」という詩を学んだ記憶があるが、彼の遺した数多くの童話や詩をあまり読んだことはない。今回私は、中尊寺とデンデラ野を見るために花巻空港を利用することにしたので、地図を見ていたら、そのすぐ側に宮沢賢治記念館があることに気がついた。私は、ついでにその記念館を訪ねてみた。宮沢賢治は、一般に童話作家として有名であるが、科学、芸術、宇宙、宗教、農などにも精通していたという。記念館には、それらの業績がわかりやすく陳列、解説してある。この記念館でなにより私の興味を惹きつけたのは、玄関脇にある「よだかの星」の彫刻碑だった。宮沢賢治の童話の中では、私は、「銀河鉄道の夜」・「セロ弾きのゴーシュ」などを知っていたが、「よだかの星」という題名は聞いたことがなかったからである。それが玄関脇に彫刻碑として建てられているということは、それが賢治の代表作の一つとされているということである。私は現場でさっそく読んでみた。以下に、ウィキペディアの「よだかの星」のあらすじを紹介しておく。



よだかは、美しいはちすずめやかかわせみの兄でありながら、容姿が醜く不格好なゆえに鳥の仲間から嫌われ、鷹からも「タカ」の名前を使うな「市蔵」にせよと改名を強要され、故郷を捨てる。自分が生きるためにたくさんの虫の命

を奪っていることに嫌悪して、彼はついに生きることに絶望し、太陽へ向かって飛びながら、焼け死んでもいいからあなたの所へ行かせてくださいと願う。太陽に、お前は夜の鳥だから星に頼んでごらんとと言われて、星々にその願いを叶えてもらおうとするが、相手にされない。居場所を失い、命をかけて夜空を飛び続けたよだかは、いつしか青白く燃え上がる「よだかの星」となり、今でも夜空で燃える存在となる。

岩手県南部には、かつて黄金文化で栄えた平泉がある。中尊寺の金棺ミイラは、今でも多くの観光客を惹き付ける。その黄金文化を支えた地方には、極貧のゆえの捨老の場所＝デンデラ野があちこちに残っている。今では、そこには人がほとんど寄りつかない。同じ人間として生まれても、その格差は今にいたるまでも延々と続いていると言えるだろう。宮沢賢治は、それらを冷徹に見透かしながら、その格差解消の夢を、「よだかの星」に託したのではないだろうか。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 _米)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016年												
1月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。